

I 令和元年度 SGH 研究開発完了報告書

令和 2 年 3 月 31 日

研究開発完了報告書

文部科学省初等中等教育局長 殿

住所	福岡県福岡市城南区別府 5-7-1
管理機関名	学校法人中村学園
代表者名	理事長 中村 量一 印

令和元年度スーパーグローバルハイスクールに係る研究開発完了報告書を、下記により提出します。

記

1 事業の実施期間

平成 31 年 4 月 1 日 ～ 令和 2 年 3 月 31 日

2 指定校名

学校名	中村学園女子高等学校
学校長名	奥井 裕紀子

3 研究開発名

地球規模の課題「食」を通じたグローバル・リーダーの育成

4 研究開発概要

本校が考えるグローバル・リーダーの育成に必要な資質を、プロジェクト型学習（PBL）を主軸とした教育課程を開発し、「食」という地球規模の課題解決に取り組ませることを通じて育成する。併せて、ルーブリックによる評価方法の開発と実施、高大接続の拡充と新たな入試制度への対応を行っていく。

SGH 事業最終年度を迎えるにあたり令和元年度に特に注力した取り組みとしては、グローバル人材育成に関わる様々な取り組みの完成度を最大限に高めることを念頭に置き、次の 6 項目について実施した。

- [1] 「食のサミット」の開催について、これまでで最大規模の行事となるように広報を強化
- [2] 2 年次から開設している現行 SG クラスに代わる新しいクラスの構想確定と実施計画の策定
- [3] 文理融合型の新しいカリキュラムの作成（新しい探究科の内容の検討等も含む）

- [4] 留学生の効果的な活用（授業、研修・学校行事等の実施）
 [5] 高大連携を促進し、生徒たちに高度な学びを提供するための大学講座の先取り履修の実施
 [6] グローバル教育の実施や新しい教育構想の提案等の研究開発を行う新しい部署「教育開発部」を立ち上げ、SGH 事業及び SGH 事業後の取り組みに対応した学校内部の組織化

5 管理機関の取組・支援実績

（１）実施日程

業務項目	実施日程											
	4 月	5 月	6 月	7 月	8 月	9 月	10 月	11 月	12 月	1 月	2 月	3 月
① 高大連携、支援団体との取り組み	○	○	○	○	○	○	○	○	○		○	○
② 教員研修の充実			○	○	○	○	○	○	○	○		○
③ 運営指導委員会の開催・SGH 指導体制充実の助言等			○	○			○				○	
④ 成果普及	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○

（２）実績の説明

① 高大連携、支援団体の取り組み

- ▶ 系列大学である中村学園大学と協議し、推薦入試に関する新制度を構築して 3 年目にあたる。2 年目の変更し、さらに若干の変更を加えて実施した。（高校 3 年併設大学進学希望者対象／年間）
- ▶ 系列大学の教育内容への理解を深めるために、学部学科説明会や模擬授業、及びオープンキャンパスへの参加を促した。（全校生徒対象／年間）
- ▶ 系列大学への推薦入学希望者を対象とした入試の一次審査を実施した。また、大学実施の入学前準備講座の受講を義務づけた。（高校 3 年併設大学進学希望者対象／年間）
- ▶ 系列大学と協議し、科目履修生制度を新たに実施することで、大学進学後の単位認定につながる制度の構築を進めた。また、科目履修の前段階として、公開授業参加制度も実施した。（高校 1・2 年／年間）
- ▶ 海外進学を目指す生徒への機会の拡大を図るため、ハワイ大学カピオラニ・コミュニティ・カレッジ（ハワイ大学 KCC）と協定を結び、進学制度を定めた。（全校希望生徒対象／年間）
- ▶ 留学生の進学を支援するために系列大学への進学に関する制度を協議し、入学への支援体制を構築した。（留学生対象／年間）
- ▶ 中村学園大学教員（短期大学部食物栄養学科准教授 1 名）による講座を実施し、食と英語に関連づけたテーマ設定により専門的な見地からの支援を行った。（高校 1 年希望者対象／夏休み）
- ▶ 探究活動やキャリア教育のために、九州大学、国連 WFP 協会等から指導・助言を得た。（全校生徒対象／年間）

② 教員研修の充実

- ▶ アクティブ・ラーニング学習会を実施した。（希望者対象／年間 3 回）
- ▶ 次世代教育を担う中堅教員の研修会（中村学会）を開催した。（指定教員／年間 9 回）
- ▶ アクティブ・ラーニングの専門家を招聘し、生徒が学びの主体となる学校づくりに関するワークショップを職員研修として実施した。（全教員／年間 1 回 1 日間）
研修成果をその後の実践に生かすよう、教師による学期末の自己評価（指導指標）の項目に盛り込み、実践を促進した。（全教員／年間 2 回）
- ▶ 教員の授業力向上のために、Teacher's Trainer の資格を持つ教員に来校してもらい、アクティブ・ラーニング学習会を実施した。（希望者／年間 2 回）
- ▶ SGH 指定校や WWL 拠点校の取り組みを学ぶ研修会や成果報告会に参加した。（指定教員／年間 4 回）
- ▶ 外国語（英語）教育改革特別部会に参加した。（指定教員／年間 1 回）
- ▶ 教員向け公開講座—スピーキング編、リスニング編を実施した。（希望者／年間 2 回）

③ 運営指導委員会の開催・SGH 指導体制充実の助言等

- ▶ 計 3 回（6 月・10 月・2 月）を実施した。
- ▶ 第 1 回では SGH 事業に臨む新体制の部署（教育開発部）の設置、各部署の課題と年間計画等について説明を行い、今後の運営についての意見や助言をいただいた。その後、SG クラスの授業参観と学習内容についての質疑を行った。
- ▶ 第 2 回では「食のサミット」及び水仙祭の実施報告、SG クラス生徒によるマレーシアへの海外研修計画の説明、アジア高校生架け橋プロジェクト留学生による水仙祭での自国文化の発表内容を紹介した。質疑応答の後に国際化や探究活動の展開等についての指導・助言を受けた。
- ▶ 第 3 回は SGH 報告会（探究科や海外フィールドワークの成果発表等）を兼ねて実施し、報告会後に今年度及びこれまで 5 年間の SGH 事業の総括を行った。報告会では他校の教員や企業、学習塾、保護者等から多くの参加を得た。

SGH 運営指導委員

米濱 和英	株式会社リンガーハット 代表取締役会長兼 CEO	海外展開する企業経営者
小野 博	グローバル人材育成教育学会 理事長	学識経験者
末松 大和	NP0 法人アジア太平洋こども会議・イン福岡 専務理事	国際ボランティア運営者
岩本 仁	学校法人福岡成蹊学園 理事長	日本語学校経営者
新澤 和幸	福岡県人づくり・県民生活部私学振興・青少年育成局 参事補佐	関係行政機関職員

SGH オブザーバー

副島 雄児	国立大学法人九州大学 副理事	学識経験者
-------	----------------	-------

- ▶ 運営指導委員会からの報告をもとに、中村学園理事会で事業の進捗状況を把握するとともに、委託費の適正使用について管理を行った。

④ 成果普及

- ▶ 3 回目となる「食のサミット」を、一般来場者を含む約 1,500 名が参加して 7 月中旬に開催した。これまでで最多となる 7 カ国 32 チームからの応募があり、予選を通過した本校生徒 1 チームを含む 7 カ国（日本・アメリカ・ウズベキスタン・韓国・マレーシア・バングラデシュ・

モンゴル) 9 チームが「食と飢餓」をテーマにコンテスト及びディスカッションを行った。ここで取りまとめた「食と飢餓」の問題に関する解決策について記載した提言書を、国連 WFP 協会に提出した。

- ▶ 本校の HP (日本語・英語) 上で、SGH 事業に関する活動状況を計 40 回報告した。
- ▶ 「SGH だより」を 2 回 (10 月・2 月) 発行し、計 10 件の活動等を報告した。(配付先：県内中学校・学習塾、SGH 指定校・WWL 拠点校・SGH アソシエイト校、学校説明会の来校者等)
- ▶ 学校広報誌「すいせん」や校内文集「言の葉 第 19 集」に SGH 活動に関する記事を掲載し、活動状況を報告した。(配付先：生徒及び保護者、県内の中学校・学習塾、学校説明会等の来校者、学園併設校)
- ▶ 中学生を含む生徒全員が参加する成果発表の場としての SGH 報告会を 2 月に開催し、海外フィールドワークや、留学生とコラボした食問題の発表、次回の食のサミットのテーマ「食の安全性」についてのポスターセッションを行った。

6 研究開発の実績

(1) 実施日程

業務項目	実施日程												
	4 月	5 月	6 月	7 月	8 月	9 月	10 月	11 月	12 月	1 月	2 月	3 月	
① 探究科授業(2 年)	第 1 クール			第 2 クール			第 3 クール		第 4 クール			まとめ	次年度準備
探究科授業(3 年)	「食のサミット」探究活動				論文作成・進路実現へ向けての取り組み等								
② 進路講演				準備	講演						準備	*中止	
③ コミュニケーション能力の向上	年間を通して実施												
④ 海外フィールドワーク					準備	実施				準備		*中止	
⑤ グローバルマインド醸成		準備				実施							
⑥ SG 講座・講演					講座	講座			講演	講座			
⑦ 食のサミット	予選	準備	実施								次回参加者募集		
⑧ 指導・評価方法	年間を通して実施												
⑨ ルーブリック	年間を通して実施												
⑩ 高大接続改革	連絡会・協議			基礎学力検査		協議		併設校推薦入試実施	検証・次年度に向けての協議				
	対策講座・説明会・模擬授業・オープンキャンパス等の実施												
		公開授業				科目履修制度	公開授業	科目履修制度					
⑪ 英語運用能力の向上	年間を通して実施												

* 新型コロナウイルス感染症対策のため中止

(2) 実績の説明

A. 課題解決能力の育成・PBL 開発実践

① 探究科授業の実施（高校 2・3 年生 SG クラス対象／年間）

- ▶ 教科横断型の PBL で探究科の授業を実施した。
- ▶ 「食」に関する 4 テーマ「食と社会文化」「食と経済」「食と環境」「食と栄養」を中心に全 4 クールを実施した。
- ▶ 各クールを本校の異なる教科の教員が複数名で担当し、必要に応じて外部講師を招いて講演や実習を行った。
- ▶ 探究の成果を SGH 報告会で発表した。（全校生徒対象／3 学期）
- ▶ 「食のサミット」に向けてチームごとに探究活動を行い、課題の解決策の動画及び提言書を作成した。（高校 3 年生 SG クラス 30 名／1 学期）
- ▶ 個人探究の成果を論文としてまとめ、論文集を作成した。（高校 3 年生 SG クラス 30 名／年間）

② 進路講演

- ▶ 進路講演（1 回目：高校 2・3 年生 SG クラス 39 名及び高校 1 年生希望者対象／夏休み）
ケニア在住の卒業生が「アフリカに住んで」というタイトルで講演を行った。異国での社会・文化・生活習慣等の違いについて知り、視野を広げるとともに、女性としての生き方やチャンスの生かし方等について考える機会を得た。
- ▶ 進路講演（2 回目：新高校 2・3 年 SG クラス 53 名及び高校 1・2 年生希望者対象／3 月）※新型コロナウイルス感染症対策のため中止
昨年 12 月の「ストックホルム国際青年科学セミナー」に日本代表の学生として参加した現役の大学院生による、自己のキャリア形成や国際協力等の内容で講演を予定していた。

③ コミュニケーション能力の向上（全校生徒対象／年間）

- ▶ 各教科でペアワークやグループディスカッション、ディベートなど多様な形態での学習活動を実施した。
- ▶ 異文化コミュニケーションを目的とするアジア高校生架け橋プロジェクトの留学生との交流会や合同授業、課題発表などを実施した。（高校 1 年 SG クラス内定生徒 29 名、高校 2・3 年 SG クラス／2～3 学期）
- ▶ 国内外に関わらず、生徒が自主的に、外部団体が主催する各種研修（下枠内）に参加し、能力の向上に努めた。

■ 日本の次世代リーダー養成塾

■ グローバル人材育成キャンプ

■ G20福岡財務大臣中央銀行総裁会議高校生提言書提出代表・勉強会

■ APU サマーキャンプ

■ アジア太平洋子ども会議・イン福岡

■ アメリカンビレッジ

■ 福岡県主催高校生イングリッシュキャンプ

■ 英語暗唱スピーチコンテスト

■ 第45回英語弁論大会（Fukuoka8） 等

④ 海外フィールドワーク

- ▶ マレーシア・シンガポール海外フィールドワーク（高校2年生 SG クラス対象／2 学期）
高校2年生 SG クラス 24 名が、「食」に関するテーマに基づき、日系企業（飲料メーカー）や日本食レストラン・現地大学（UTM）及び姉妹校（SIGS）などで4泊6日のフィールドワークを行った。
- ▶ カリフォルニア海外フィールドワーク（高校1年生希望者対象／3 学期）※新型コロナウイルス感染症対策のため中止
参加を希望した高校1年生 17 名が、事前課題として「食」に関する探究課題を設定し、日米の「食」の違いについて学習した上で、現地に赴き各自の探究テーマ別に現地の食品工場や他の企業等の協力を得て10泊11日のフィールドワークを行う予定であった。

⑤ グローバルマインドの醸成

- ▶ グローバル・キャンパス（高校1年生対象／2 学期）
高校1年生 375 名が、様々な国や地域出身の立命館アジア太平洋大学留学生の協力を得て、「食」に関する各グループの課題について学び考える2泊3日の英語による協働体験学習を実施した。
- ▶ アジア高校生架け橋プロジェクト留学生受け入れ（9 カ国 10 名／9 月～3 月）
インド・スリランカ・マレーシア・ブルネイ・インドネシア・タイ・カンボジア・ラオス・ミャンマーから9カ国10名の留学生を受け入れ、1名ずつ別々のクラスに配属した。文化祭や全校集会、SGH 報告会等の様々な行事で、自国の文化や食習慣等の発表を行い、グローバル・キャンパス、SG クラスの授業や中学生のスクールランチに参加する等により、全校生徒との国際交流を頻繁に行った。

⑥ SG 講座・SG 講演

- ▶ SG 講座（1 回目：高校1年生希望者 34 名対象／夏休み）
高大連携の一環で、夏休みに中村学園大学短期大学部から講師として津田晶子准教授を招聘し、「英語で楽しむ日本の食文化」と題した講座を実施した。
- ▶ SG 講座（2 回目：高校1・2 年生希望者 53 名対象／9 月）
立命館アジア太平洋大学の学生（ハビタット APU）に世界の貧困の現状と貧困地域でのボランティア活動の報告をしてもらうことで、今年度の食のサミットのテーマである「食と飢餓」の現状を再認識する機会を得た。
- ▶ SG 講座（3 回目：高校1年生 SG クラス内定者、高校2年生 SG クラス計 38 名対象／3 学期）
渡辺大輔氏（渡辺大輔有限公司）を講師として招聘し、生徒たちは海外で働くことの意義や現地での交流の醍醐味等についての話を聴き、質疑応答することを通して、日本人としての誇りや自覚を持ちながら海外で働き、世界に貢献することの大切さを学んだ。
- ▶ SG 講演（中学生及び高校1・2 年生約 1,000 名対象／2 学期）
白駒妃登美氏（株式会社ことほぎ）を講師として招聘し、「日本のこころを学ぶ～真の国際人となるために」と題した講演を実施した。真の国際人となるために必要となる日本の文化や歴史への理解、日本文化の特徴である「和」について学び、日本を深く知る機会となった。

⑦ 食のサミット（全校生徒対象／7月）

- ▶ SG クラスの探究活動における成果の集大成として、3 回目となる「食のサミット」を実施した。
- ▶ 昨年度に引き続き自校校舎での開催であり、一般来場者及び本校の中学・高校の全生徒を含む 1,499 名が参加した。
- ▶ 予選を通過した 7 ヶ国 9 チームの本選出場者が、テーマである『世界における「食と飢餓」に関する諸問題とその解決策』について発表し、共同宣言の策定を行った。策定した共同宣言を提言書として後日、国連 WFP 協会へ提出した。

B. ルーブリック開発と運用

⑧ 指導方法と評価方法（アクティブ・ラーニングの実践）（全教職員対象／年間）

- ▶ 基礎的な学習理論の習得、アクティブ・ラーニング型授業の実践報告、教育研修会の参加報告、指導法や評価法の検討等を行う学習会を 3 回実施した。また、学園が主導する中村学会では、産学連携による PBL や教科横断型授業、男女別学教育等の理解を深めるとともに、先進的な取り組みを行っている中高一貫校を訪問することによって得た学びを自校の実践に生かす試みを行った。
- ▶ 夏期職員研修にて『生徒が「学びの主人公」という学校を創る』と題したワークショップを実施し、全教員が授業や学校行事への取り組み、生徒指導などの改善へ向けた活発な意見交換を行った。
- ▶ 各教員が指導指標を用いて自身の学習指導の実態を自己評価し、授業の検証を行った。

⑨ ルーブリック（高校 2・3 年生 SG クラス対象／年間）

- ▶ 今年度も既に開発したルーブリックを活用する目的や学習過程に応じて、部分的に修正・改良して使用した。（探究科の各領域、食のサミットでのプレゼンテーションの審査、課題研究成果論文の評価等で使用）
- ▶ 昨年度作成した 1 年次のグローバル・キャンパスにおける生徒リフレクション用のルーブリックは複雑であり、評価に時間を要するため、評価項目を精選した上で評価段階を 5 段階から 3 段階に簡略化したものを作成した。また、指導者自身の振り返りや、個々の生徒に対する指導上の留意点の意識づけをねらいとして、指導者が生徒を評価するためのルーブリックを新たに作成して試行した。

C. 高大接続と新たな入試制度への対応

⑩ 高大接続改革

- ▶ 大学入試改革に対応した新コース制を導入して 2 年目となる今年度は、新入試制度とコースの内容に関する説明会等を計 7 回実施し、生徒及び保護者への周知徹底を図った。（高校 1 年生対象／1～2 学期）
- ▶ 平成 30 年度入学生から高大接続改革における大学入試での主体性評価を踏まえ、生徒の活動の記録と振り返りを促すためポートフォリオの作成を行っている。今年度は、改訂される調査書の記載内容を踏まえる形で、「1 年間の活動記録」としてまとめた。（高校 1・2 年生対象／年間）

- ▶ 併設大学との高大接続プログラムをより充実させるために、新たに大学公開授業への生徒参加制度と科目履修生制度を導入した。高校2年生に対し、6月に公開授業の生徒参加を試験的に行い、その実施状況を踏まえて大学後学期の科目履修生制度につなげた。高校1年生には11月の公開授業から参加を募った。（高校1・2年生対象／年間）
- ▶ SGクラス選考に際しては、従来通り1次選考（書類選考）と2次選考（面接・プレゼンテーション）の2段階選抜を行い、基礎学力・英語力に加え、主体性やコミュニケーション能力等、多面的な評価を行った。（高校1年生希望者／2学期）

D. 課題研究以外の取組

⑪ 英語運用能力の向上（全校生徒対象／年間）

- ▶ 通常の授業に加え、リスニングソフトを活用した自主的学習を推進し、定期考査の中で積極的にListeningの試験を入れた。
- ▶ 英語運用能力向上のための各種のコンクールやコンテスト等に取り組んだ。イングリッシュキャンプや英語ディベート交流大会等の行事への積極的な参加を促した。
- ▶ SGクラスではネイティブの教師を副担任として配属し、HR活動を行うとともに、英語によるペアワークやグループディスカッション、ディベート等の多様な形態で学習活動を実施した。
- ▶ 高校2年特進コース5クラスに、従来の英検に加えて、GTECの受検を義務づけた。
- ▶ セブ島語学研修（高校3年生希望者対象／3学期）
大学進学準備のために英語力を向上すべく、3週間コースの語学研修に1名が参加した。
- ▶ 昨年度より実施している外部講師による英検準1級対策講座を今年度も実施した。既に英検2級を取得している生徒を対象にした講座であり、次年度の6・7月に実施される第1回英検での準1級合格者を増やすことを目的としている。昨年度よりも受講者が増え、今年度は27名が受講した。

7 目標の進捗状況、成果、評価

目標【i】①「食」という地球規模の課題に取り組むPBLを主軸とした一連のプログラムを各教科の中での実施方法や相関関係を明らかにする等してカリキュラム化し、総合的な学習の時間及び学校設定科目の内容を含めて再編する。

今年度も高校2・3年SGクラスにおいて教科横断的科目「探究科」を実施した。そこでは指導内容や評価の最適化を図るなど完成度をさらに高めることができた。課題となっている他教科の中で教科内容を関連させながら計画的・系統的に実施するカリキュラム・マネジメントについては、SGクラスだけの改変ができない状況が続いており、今年度も教科担当者レベルでの連携に留まっている。「探究科」だけではなく、「総合的な学習の時間」自体のカリキュラム・マネジメントを学校全体として取り組んでいく必要がある。

「探究科」をはじめとした課題研究の取り組みでは、まず身近な日本の「食」について考えさせ、それを理解した上で世界へと視野を広げていくよう配慮して指導した。2月に開催したSGH報告会のポスターセッションでは、海外からの転入生の発表を除くほぼ全員が、日本国内に関係する食問題について発表した。

目標 [i] ②上記カリキュラムを実施していくにあたって、ルーブリックにより生徒の自己評価及び教員に対する新たな指導方法・評価方法の開発を行う。

今年度も、昨年度に引き続いて作成したルーブリックの部分的な改良を行い、探究科の全授業で使用して適切に生徒の形成的評価を実施した。特に先に記した「6 研究開発の実績」(2) B⑨のルーブリックの項でも触れたが、適切な評価ができるだけでなく、実践での利用のしやすさも評価方法の開発にあたって大切な要素であると考え。この意味では、今回のグローバル・キャンパスでのルーブリックは評価項目と評価基準を精選することで、より良いものを作成できた。

教員の自己評価に関して、昨年度から推進している「深い学びを促す」授業の工夫の実施については、約半数の教員が実践を行っており、毎学期の指導指標の測定ごとに多数の実践事例があげられている。また、「生徒が学びの主人公」となる授業改善の実施に関する指標項目を新たに設け、教え込みや教師の一方的な指導からの脱却を図る等、一定の効果を得た。今後もこの取り組みを継続し、生徒が主体的に考える授業の実践が校内のすべてのクラスで行われるようにしていきたい。

目標 [ii] ①SG クラス所属の生徒全員が、CEFR の B1～B2 レベルに達するものとする。

SG クラス 3 期生となった生徒たちの卒業時の CEFR の B1 レベル達成率は 63%であった。来年度は目標値である 100%の到達を目指し、受検対策や日常の英語力強化のため、指導の改善を引き続き行っていく。

目標 [ii] ②「食のサミット」を開催し、当該サミットでの結果等を取りまとめ、連携する国際機関（国際連合世界食糧計画 WFP 協会）に対して提言を行う。

本事業の集大成となる 3 回目の「食のサミット」を昨年度に引き続き本校で開催した。SGH 事業の最終年度としての開催であったため、法人の協力によりこれまでで最多の 7 カ国 8 チームを本選に招待することができ、盛大な会にすることができた。また、広報を強化したこともあり、エントリー数もこれまでで最多の 7 カ国 32 チームにのぼった。テーマについては、毎回「食」を異なる視点から捉えつつ、各チームの提言を取りまとめしやすくなるよう、前回の「食と水」から今回は「食と飢餓」を扱うものに決定し、具体的かつ現実的なアクションプランを提言することができた。今後は課題となっているプレ会議までのビデオ会議をより充実させ、本番当日により深い議論ができるよう計画的に準備を進めていく予定である。

8 5 年間の研究開発を終えて

(1) 教育課程の研究開発の状況について

SGH 事業開始まで、本校には特別な探究型学習に関する教育課程を設けておらず、これからの国際社会を生きるために建学の精神の一つである「日本人としての自覚」を育成すべく、生徒全員が「日本史 A」と「道徳」における茶道を履修することで、日本の歴史や文化と礼法を身につける教育を行ってきた。SGH 事業開始後は、2 年次より「SG クラス」を設置して、総合的な学習の時間を増単位した「探究科」を教育課程の中に位置づけた。この「探究科」の実践を通して、本校の主要テーマとなる地球規模の課題「食」を切り口とした課題探究型の PBL を授業展開しながら、主

に次の 3 項目の教育開発を行った。

- [1] 「食」の 4 領域（食と社会文化、食と環境、食と経済、食と栄養）をテーマとした PBL
- [2] PBL の学習過程で用いる生徒の形成的評価を測定するためのルーブリック
- [3] グローバル・キャンパス、海外フィールドワーク、食のサミット等の企画・立案・実施

この他にも、令和元年度から 2・3 年次の SG クラスに学校独自科目「英語探究」（各学年 2 単位）を設け、グローバル人材に必要となる実用的な英語力の強化を図っている。また、全校で取り組む教育の 3 本柱であるグローバル教育、女子教育、キャリア教育を、探究活動と連動させて体系化した「キラリキラリプロジェクト」を通して、道徳や学校行事、特別活動ともリンクさせた教育活動を展開している。以上のように、本校におけるグローバル人材を育成するための教育課程は、少しずつ変化し成熟してきた。

これらの変化と並行して、令和 2 年度より新たに開設するグローバル・イノベーター（GI）を育成する教育課程も開発してきた。これから新設する「GI クラス」の教育課程は、これまでのグローバル・リーダー育成の研究開発の発展型と位置づけている。大きな変化としては、これまで 2 年次から開設してきた「SG クラス」のようなグローバル教育に特化したクラスを「GI クラス」として 1 年次より設けることや、それに合わせて 2 年次より開始してきた「探究科」の科目を「GI 探究」と改称して 1 年次より 3 年間を通して SDGs とともに内容を絡めながら体系的に履修することである。さらに、これまでになかった留学プログラムも 1 年次に導入する。このように、これまで行ってきた本校の SGH 事業を起爆剤として、グローバル人材育成に関する教育課程は、大きな発展を遂げている。

（2）高大接続の状況について

① 併設大学との新しい取り組み

SGH 事業に採択される以前の平成 26 年度より、併設大学である中村学園大学との間で、内部進学者のミスマッチによる学業不振や進路変更による退学者をなくすために、従来の併設校推薦入試制度の見直しを検討し始めた。令和 2 年の大学入試改革に向けて、生徒の興味・関心を喚起し、主体的な進路選択を促すために、筆記試験に表れる学力だけでなく、学部・学科や将来の職業への興味・関心の高さや熱意を校内選考に反映させる方法を検討した。そこで構築した新たな併設校推薦入試制度では、意欲を見るために大学との連携行事への生徒の参加を義務づけ、学力審査として「基礎学力検査」を実施することで、より意識の高い生徒が志願するようになった。ただし、他の私立大学・短期大学の指定校推薦入試に比べ生徒の負荷が大きいため、結果的には志願者の減少を招いている。生徒の志望の変更等に柔軟な対応ができるよう、毎年若干の変更を加えているが、公開授業への参加や科目履修生制度等、新たな取り組みも踏まえ、より良い制度を今後も検討していく必要がある。

今年度における最大の成果は、科目履修生制度の実施である。高大接続における AP プログラム実施への試験的な取り組みとして、今後も大学と協議を重ねていきたい。

② 主体性評価に向けての活動履歴の蓄積とポートフォリオ

大学入試改革における主体性評価に向けて、平成 30 年度入学生より学習支援サービスである Classi を利用して活動履歴の蓄積を行ってきた。個人差はあるものの、多くの生徒がより深化した振り返りを行えるようになった。課題としては、行事や活動の振り返りが単発のものとして終

わたった生徒が多いので、3年間を通してつながりのあるものとしていくようにしたい。また入試への活用については令和3年度入試での活用で検証していく。

③ 海外への進学

海外進学制度としては、昨年度にハワイ大学 KCC と協定を結んだ。初年度は協定を結んだ時期が年度途中であったために進学者が出なかったが、今年度は2名が進学する。海外進学に関しては下の表1に示しているように、このハワイ大学 KCC をはじめとして少しずつではあるが増加傾向にある。特に今年度の卒業生は、中学3年次に本校が SGH の指定を受け、その取り組みを理解した上で本校への入学を決めた学年であり、3年間を通じて SGH 事業を実践した初めての卒業生である。その意味で、海外進学者の増加は SGH 事業との関連性が深いと言える。また、昨年度より多くの留学生を受け入れ協働体験を行い、来年度からの GI クラスに留学プログラムを導入する予定であるので、今後の海外進学者数の伸びを期待するところである。

表1 SGH 指定後の進学実績 年度比較

指標項目	生徒区分	令和 元年度	平成 30年度	平成 29年度	平成 28年度	平成 27年度
国際化に重点を置く大学（SGU）へ進学する生徒数	SGH 対象	6	5	4	—	—
	SGH 非対象	25*	28	23	37	19
海外大学へ進学する生徒数	SGH 対象	4	3	1	—	—
	SGH 非対象	1	0	2	1	0

* 国公立後期入試結果まで令和2年 3月 21日現在

④ 海外からの転入生の進学支援

本校への海外からの転入生の進学支援に関しては、併設大学との間に制度を設けるほか、校内の推薦等の規程を見直し、門戸を広げる等で対応した。日本留学試験や日本語能力試験のスコアを伸ばすためのプログラムも実施した。課題としては転入生への日本語教育は専門性がないと難しく、通常の教員では困難な部分があり、十分な実施とは言えなかった。併設大学の留学生（該当留学生と母国語を同じくする）にスチューデント・ジョブ制度を活用して日本語指導を依頼した。今後この制度を有効に活用していきたい。

（3）生徒の変化について

5年間の SGH 事業による生徒の変化の中で最も大きいものは、グローバル・リーダーとしてのベースとなる幅広い視野を持ち、学習（課題）へ取り組む積極性である。年度末に実施している SGH 効果検証のための生徒意識調査では、この他にも多様性の受容、コミュニケーションの必要性、課題解決力等の多くの項目で高値の結果が出ており、しかも学年の進行とともに値が増加する傾向が見られた。これらはグローバル・リーダーとして必要となる資質・能力であり、今後のさらなる成長が期待される。また、SG クラスの担任をはじめ教科担当者の多くから聞くことができた生徒の変化は、志望校の選択に際して「実力に見合った大学を第一に考えるのではなく、個々の生徒が『何を学ぶのか』という確固たる目的意識をもつことを優先して考える」ようになったということである。これは、SGH 事業で培った主体的に学ぶ意欲の表れと言えよう。

下の表 2 には SGH 構想において実現する成果目標の年度比較を示している。SGH 事業の開始当初に設定した目標値に到達しなかった項目もあるが、留学や海外研修への参加、卒業後に留学したり国際的な活躍を希望する生徒が徐々に増加してきている。この増加が、SGH 対象生徒だけではなく、非対象の生徒にまで波及していることから、SGH 事業の全校あげでの取り組みが功を奏していることが読み取れる。英語力の育成については、まだまだ改善しなければならない点も多いものの、CEFR の B1～B2 レベルの到達者の実数としては、SGH 事業の開始当初から見ると劇的に増加している。英語の資格検定試験の準備講座の充実や、教科担当者や担任などによる指導によって生徒の取り組みへの意識が高まった結果であると考えられる。次年度の入学生から新設する GI クラスには、留学プログラムを導入する予定であるので、その成果によってかなり目標値に近づけるものと期待している。

表 2 SGH 構想において実現する成果目標 年度比較（抜粋）

指標項目	生徒区分	目標値	令和 元年度	平成 30 年度	平成 29 年度	平成 28 年度	平成 27 年度
自主的に留学または海外研修に行く 生徒数	SGH 対象	30	37*	40	30	28	30
	SGH 非対象	35	14*	19	6	4	3
将来留学したり、仕事で国際的に活 躍したいと考える生徒の割合（％）	SGH 対象	50	44	45	42	39	39
	SGH 非対象	20	39	41	38	11	—
卒業時における生徒の 4 技能の総合 的な英語力として CEFR の B1～B2 レ ベルの生徒の割合（％）	SGH 対象	100	63	52	77	—	—
	SGH 非対象	30	18	9	6	3	1

*やむを得ず中止になった研修の参加予定者を含む

（４）教師の変化について

平成 28 年度から毎年度末に行ってきた教職員意識調査の結果をあとの図 1 に示す。この数値より次のことが明らかである。

- ▶ 多くの項目において年度間に増減は見られるものの、いずれも高値で推移しており、SGH 事業を通して教職員に望ましい意識や行動の変化が良い効果として現れている。
- ▶ 質問 6 の結果から、留学や SGU 等の国際化に重点を置く大学への進路指導を行っている教職員の割合がかなり増加している。
- ▶ 質問 8 の結果から、SGH 事業を進めていく過程で、教職員の国際関係情報への関心の高まりが見られる。
- ▶ 校内でのアクティブ・ラーニング型授業の実践やルーブリックの普及、職員研修や学習会等の開催により、形成的評価の実施が広く行われた結果として、質問 10 の結果のように、評価法の工夫を行う教職員が増加している。

今後は、質問項目にあるようなグローバル教育に取り組む教職員の意識をより一層高めつつ、これまでの SGH 事業で培った実践のノウハウを学校全体へと波及させ、継続して実施していく必要があると考えている。

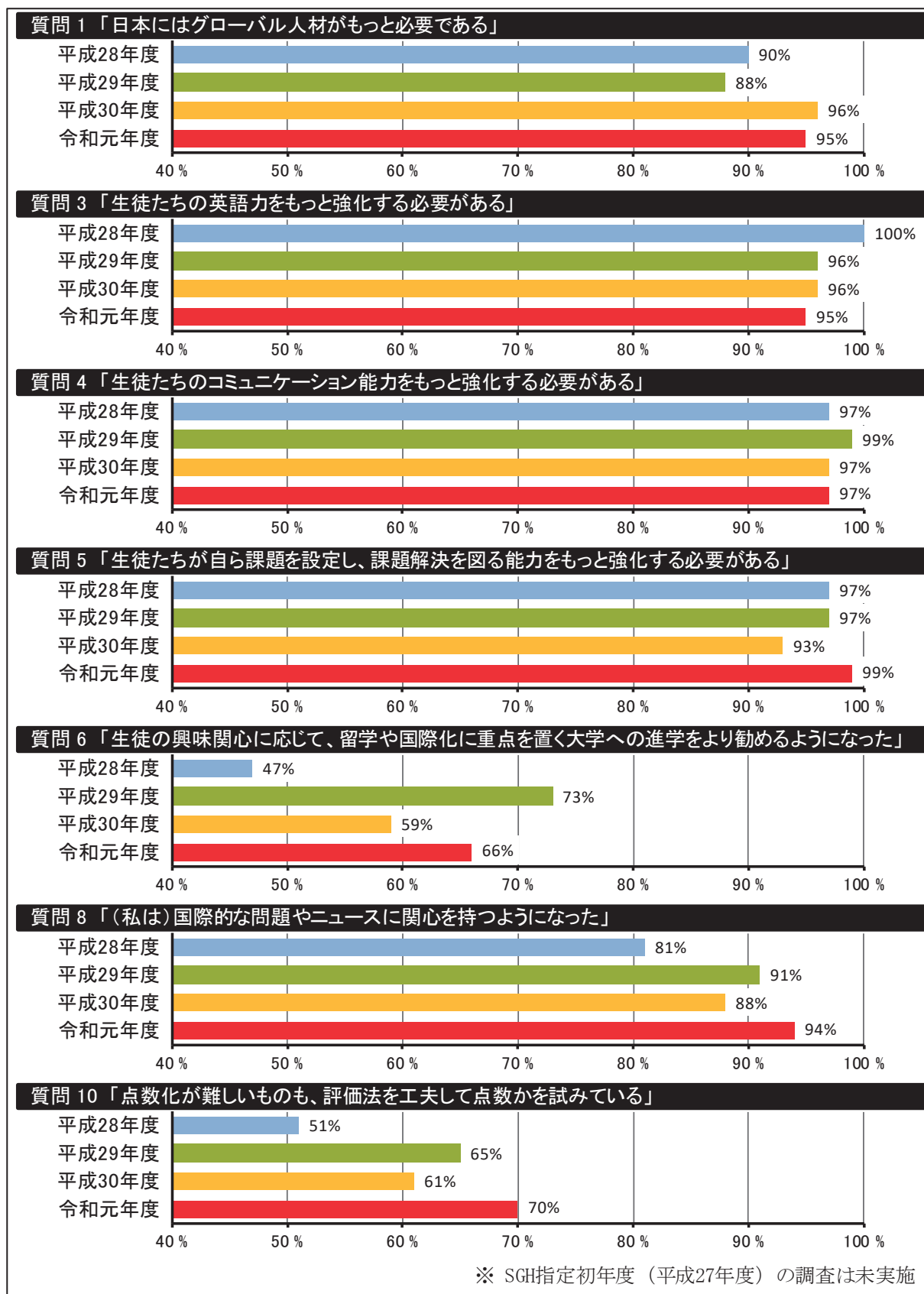


図1 SGH 事業効果検証 教職員意識調査 年度比較（抜粋）

(5) 学校における他の要素の変化について

① 授業の変化

本校では SGH 事業以前より校内 LAN の設置や ICT 機器の整備を進めてきた。また、21 世紀型スキルを育成するための教育方法の開発と実践を行っている。毎学期末の教員による指導指標の測定結果より、ほぼ全教員が何らかの手段でアクティブ・ラーニング型の授業を実践しており、教員が所有するタブレット端末を利用して、様々な工夫をした授業を展開している。生徒たちには学年進行で個人用 iPad の導入を進めており、来年度で中学も合わせた 6 学年の全生徒が iPad を保有することになる。この iPad の導入により、デジタルコンテンツ教材の配布や小テスト・アンケート・自己評価の入力の実施等でデジタル化が進み、単純な板書スタイルの授業から ICT 機器を有効に活用した授業へと変化している。この他にも、教師による一方向的な教え込み等の一斉授業という旧来型の授業スタイルが徐々に減り、ペアワークやグループワーク等の学び合いを取り入れた授業が増加している。特に今年度の職員研修で取り組んだ「生徒が学びの主人公となる学校・授業づくり」を意識した実践が行われており、生徒たちに学習へ向かう自主性・積極性を育むための指導方法の研究を今後もさらに進めていく。

② 保護者の変化

SGH 事業の実施により、グローバル教育や海外進学、海外研修への参加に対する保護者の関心が明らかに変化してきた。以下にいくつかの例を挙げる。まず、毎年開催している「食のサミット（H29 年度より）」「SGH 報告会（H28 年度より）」には毎回 30～50 名程度の保護者が参加し、発表内容について温かく心のこもった感想を数多くいただいている。また、「ハワイ大学 KCC 学校説明会（H30 年度より）」にも、この 2 年間で約 72 組の参加があり、海外進学へのニーズの高まりが感じられる。さらに、昨年度よりアジア高校生架け橋プロジェクトの留学生を 2 年間で約 16 名迎えているが、年末年始の休暇中にホストファミリーとなったり、文化祭等の学校行事を通して保護者と留学生との交流の機会をもつ等、生徒のみならず保護者も多様性を受容し視野を広げる良い経験になっているようである。SGH 事業の様々なイベントの告知や実施報告に関しては、広報誌やオンラインによる発信を随時行っており、このことも保護者の変化をもたらした要因と言えるであろう。

③ 学校間連携

SGH 事業を通じて、本校と他の高校や大学間の連携は質・量ともに大きく変化してきた。グローバル・リーダーを育成する高校としての活動指標をあとの図 2 に示す。この指標項目 2 が示すように、連携校の数は SGH 事業初年度が 3 校だけであったものが、今年度は 14 校にまで増加した。また、連携する内容も、海外研修での文化交流が中心であったものが、「食のサミット」をはじめとする課題解決や探究活動を協働して行っていくというものに変化してきた。これは、指標項目 3 に示した大学教員及び学生等の外部人材の参画数の増加にも関係している。さらに、共に「食」をテーマとする SGH 指定校と連携を結んだことで、グローバル人材育成に関するノウハウについていち早く情報交換することができ、互いの事業推進に生かすことができるようになった。今後は、「探究科」等の課題発見・課題解決的な学習におけるより活発な交流（ディスカッション、ディベート、成果発表等）を遠隔授業や相互の学校訪問等で行っていくことにより、連携をさらに深めていく予定である。

④ 留学生や外国からの転入生・訪問の受け入れ

本校への訪問者を含めた外国人生徒の受け入れ者数は、下の図 2 の指標項目 5 が示すように徐々に増加している。この数値の変化からだけでは読み取れないが、昨年度より開始したアジア高校生架け橋プロジェクト留学生の積極的な受け入れを契機として、中国、台湾、タイ等の学校からの訪問を積極的に受け入れ、盛んに文化交流を行っている。また、中国の提携校からは毎年 1～2 名の転入生を受け入れている。さらに平成 29 年度より開催している「食のサミット」には、今年度は最多の 7 カ国から 8 チームを招き、21 名の外国人生徒が参加した。留学生や海外からの転入生が、学年集会や文化祭、SGH 報告会等の機会あるごとに食文化や食習慣の違い等を発表することによって、本校生の異文化多様性の受容や国際的な視野の広がりを育む良い機会となっている。このように、SGH 事業の期間内に外国人生徒や海外からの訪問者の受け入れを積極的に行ってきたことで、本校生がグローバル化を日常的に肌で感じられる学校へと変化している。

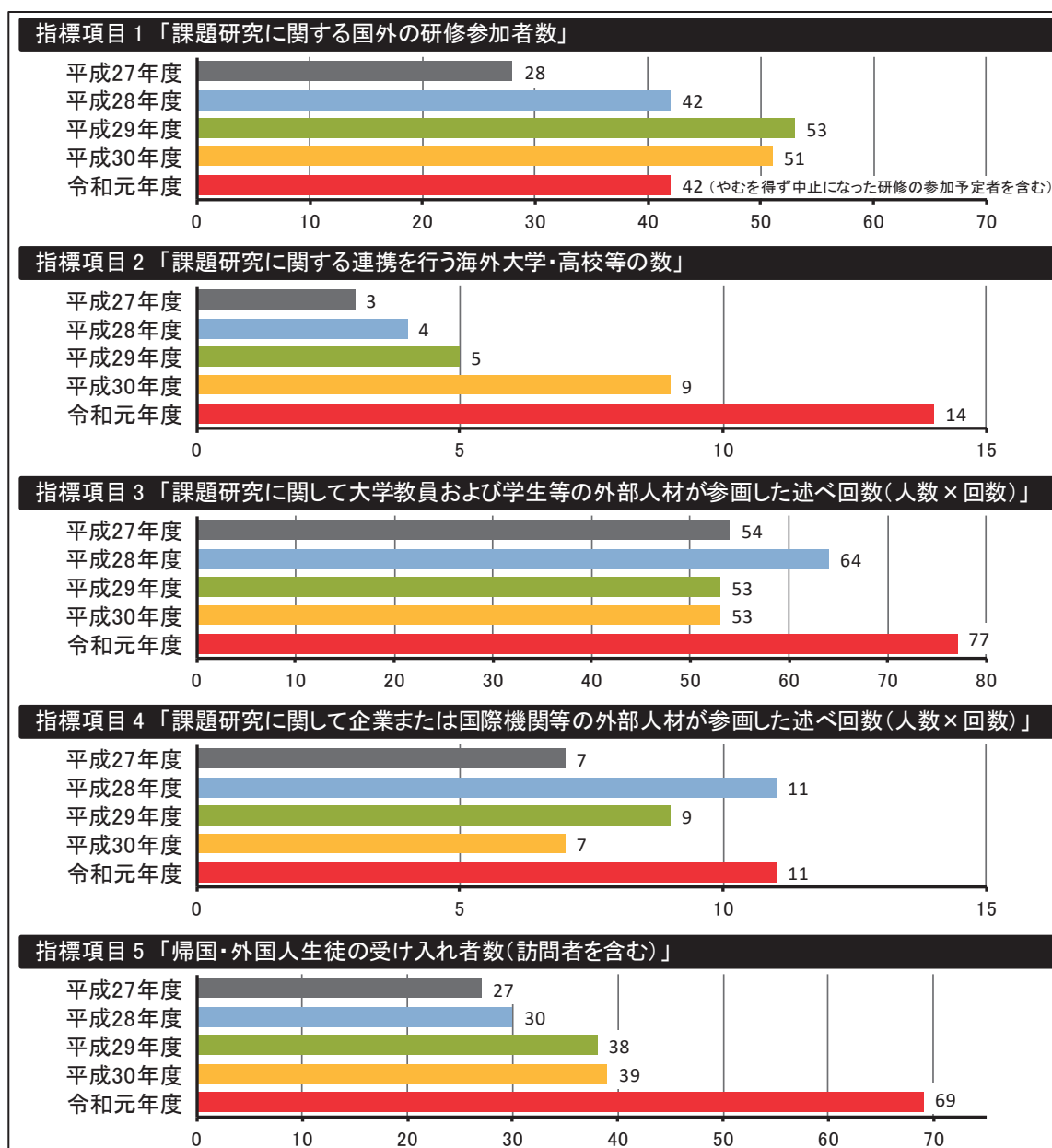


図 2 グローバル・リーダーを育成する高校としての活動指標 年度比較(抜粋)

(6) 課題や問題点について

① 全教職員の共通理解

この事業を進めていくにあたって一番大きな課題であったのは、全教職員の共通理解を得ることが難しいということである。特に本校は、SGH 対象のクラスが 2・3 学年は 1 クラスずつのみと少なく、実際に指導にあたる担当者も数が限られているからである。この課題をどのように乗り越えるかに関しては、新任者研修や年度始めの職員研修において、本校が目指す育成すべき人間像や実践していくグローバル教育についての概要を説明するだけではなく、機会を見て事業の進捗状況の報告や意見交換会等を開催することで、理解を促進していく必要がある。加えて全校で取り組む SGH 事業の行事で、いかに多くの教職員を巻き込み、事業の必要性を実感してもらうかが重要である。つまり、多くの教職員に「生徒たちが変わっていく姿を実感してもらう」ことである。これらの努力の甲斐あって、現在では多くの教職員の理解や協力が得られるようになった。今後も全教職員が協働して事業に臨めるよう、引き続き理解の促進を図っていく。

② 担当者の業務負担

SGH 事業は、担当する教員に対して、専門性や新しい教育に対する意識の高さと思考力や行動力が求められるため、どうしても特定の教員に対しての負担が大きくなる。また、校務分掌ごとの負担のバランスも大事である。決して SGH 事業を担当する部署だけに過重な負担がかかってはならない。この問題を解決するためには、業務内容の仕分けと精選、業務分担の組織化が不可欠である。この点については、業務内容が多岐に渡っているため組織化が難しく、未解決な部分が残っている。今後も課題の克服へ向けて工夫をしていかなければならない。

③ 開発した成果の一般化

研究開発の成果物が、SGH 担当教員にとっては良好なものであっても、他の多くの教員や生徒にとっては難しく扱いづらいということが、開発当初に多く見られた。例えば、生徒用のループブックや教師による自己評価を行うための指導指標等である。これらは専門的には完成度の高いものであっても、利用者にとっては複雑であり、難解で時間がかかる等の理由から、実際の運用には適切でないことが多かった。しかし、それらを実際に使いながら改善すべき点を修正し、評価項目等を精選していくことで、質を維持しながらより良いものを開発することができた。また、今後はできるだけ多くの教員が SG クラスや行事責任者等を経験することで、開発や指導のスキルを習得する必要があると考えている。

(7) 今後の持続可能性について

SGH 事業によって開発した「探究科」での文理融合型 PBL については、次年度以降も引き続いて実施するとともに、来年度より新規に開設する科目「GI 探究」（GI は「グローバル・イノベーター」の意）でさらに発展・深化させた内容を扱う予定である。この「GI 探究」では、グローバル・イシュー、食の 4 領域の PBL の他に、食の課題を SDGs と絡めたテーマ設定で進めていく。これまで開発したループブックについては、今後も評価項目や評価段階を適正なものに改善しながら利用していく。また、1 年次の「グローバル・キャンパス」、毎年夏に開催している「食のサミット」、1・2 年次の海外フィールドワークについては、次のように変更・改善していく予定である。

I 令和元年度 SGH 研究開発完了報告書

① 1 年次「グローバル・キャンパス」

これまで 1 年次の 9～10 月に生徒全員が参加する宿泊研修として、立命館アジア太平洋大学の留学生を指導者として実施してきた。来年度より SG クラスに代わるものとして、新たに 1 年次から GI クラスを設置する。これに伴い、GI クラスの生徒たちのリーダーシップ力を育成することを新たな目的として加え、そのために留学生と共に一般生徒の集団指導にあたる機会を設ける予定である。

② 「食のサミット」

これまでの 3 年間、3 回に渡って探究活動の集大成のイベントとして 7～8 月に実施してきた。国内外の連携校のサミットへの参加が定着してきたことを踏まえ、来年度からはコンテスト形式での募集をせず、サミット前日のプレ会議と並行して開催するディスカッション大会（仮称）への参加を希望するチームを広く募集する。ディスカッション大会は、国内外の中高生が世界の食問題の解決策を議論する場とし、食のサミットと同様に解決策を取りまとめ提言案を作成する。本校及び国内外の連携校から参加する代表チームは、これまでと同様にサミット当日に食問題の解決策についてのプレゼンテーションを行い、プレ会議での議論やディスカッション大会での提言案を取りまとめて提言書を作成し、後日に国連関係機関へ提出する。

③ 1 年次「カリフォルニアへの海外フィールドワーク」

これまでは 2・3 年次に開設する SG クラスを希望する 1 年生を中心に参加者を募集し、実施してきた。来年度入学生からは 1 年次より GI クラスを新規に開設し、1 年次の 3 学期に留学プログラムを導入するため、これまでのフィールドワークは廃止する。また、全校生徒や保護者を対象として、語学の習得や課題研究に関する海外研修のプランを紹介する説明会を定期的に開催して、積極的な参加を促していく。

④ 2 年次「マレーシア・シンガポールへの海外フィールドワーク」

これまで SG クラスの 2 年次に全員参加で実施してきた。次年度の SG クラスでは継続実施する。来年度から新設する GI クラスでは、グループの課題に応じて目的地の選択を行うため、マレーシア・シンガポールは研修地の 1 つとして扱う予定である。研修地をイノベーションスキルの実践・試行する場と捉え、より充実した探究活動が実施できるよう準備を進めていく。マレーシアでの姉妹校との学校間交流は継続し、さらに友好を深めていく。

管理機関である学校法人中村学園からは、SGH 事業において管理面での主導的な立場となるとともに、運営のための費用などで多大な支援を受けている。今後は、SGH 事業をさらに発展させるべく新たに構想しているグローバル・イノベーターの育成に向けた教育実践において、さらに強力な管理機関の主導のもとで連携する各種の学校や協働する企業・NP0 等の機関との結びつきを深めながら、より高度な学びの環境を整備していけるものと私たちは確信している。

【担当者】

担当課	教育開発部	T E L	092-831-0981
氏 名	平田 晃己	F A X	092-831-0985
職 名	教育開発部長	e-mail	hirata@njh.ed.jp